船頭岡っ引き控

花冷ましの霞（かすみ）

千野隆司

学研M文庫

花冷えの霞

船頭岡っ引き控

千野　隆司

学研M文庫

常州大学図書館
藏

花冷えの霞　船頭岡っ引き控

千野　隆司

学研M文庫

2013年3月26日　初版発行

発行人———脇谷典利
発行所———株式会社　学研パブリッシング
〒141-8412　東京都品川区西五反田2-11-8
発売元———株式会社　学研マーケティング
〒141-8415　東京都品川区西五反田2-11-8
印刷・製本 —中央精版印刷株式会社
© Takashi Chino 2013 Printed in Japan

★ご購入・ご注文は、お近くの書店へお願いいたします。
★この本に関するお問い合わせは次のところへ。
・編集内容に関することは——編集部直通　Tel 03-6431-1511
・在庫・不良品(乱丁・落丁等)に関することは——
販売部直通　Tel 03-6431-1201
・文書は、〒141-8418　東京都品川区西五反田2-11-8
学研お客様センター『船頭岡っ引き控』係
★この本以外の学研商品に関するお問い合わせは下記まで。
Tel 03-6431-1002（学研お客様センター）
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。
本書の無断転載、複製、複写(コピー)、翻訳を禁じます。
本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用であっても、著作権法上、認められておりません。
複写(コピー)をご希望の場合は、下記までご連絡ください。
日本複製権センター　TEL 03-3401-2382
http://www.jrrc.or.jp　E-mail：jrrc_info@jrrc.or.jp
Ⓡ〈日本複製権センター委託出版物〉

ち-2-15

目次

花冷えの霞　5
間抜けな岡っ引き　108
弥生尽の星　202

花冷えの霞

船頭岡っ引き控

千野 隆司

学研M文庫

www.ertongbook.com

目次

花冷えの霞　5
間抜けな岡っ引き　108
弥生尽の星　202

本書は文庫のために書き下ろされた作品です。

花冷えの霞（かすみ）

一

日本橋川の水面（みなも）を、風が渡ってゆく。映っていた七分咲きの桜の姿が、それで崩れた。

昨日は暖かかった風が、今日は身を切るほどに冷たく感じる。天気は日によってころころ変わるが、花をつけた桜の木を見上げると、春がすっかり町に根をおろしているのをお珠（たま）は感じる。

「おいさあ」

船頭の掛け声が響いた。

荷船が目の前の川面を、艪音（ろおと）を立てながら行き過ぎて行く。荷を満載にした

ものもあれば、運び終えたらしい空舟もあった。人だけを乗せてゆく猪牙舟も通る。

日本橋川の舟の行き来は、夜が明けたときから日が落ちる頃まで、絶え間なく続く。

それは暑かろうが寒かろうが変わらない。

お珠は河岸道に水を撒いた。船宿川澄という文字を染め抜いた暖簾が、昼下がりの春の日差しを浴びている。宿の前の船着場には、大小四艘の舟が停まっていた。

主に山谷堀への送り迎えに使う舟だが、客が望めば江戸のどこへでも舳先を向けた。

川澄といえば、この日本橋小網町三丁目行徳河岸では、知らぬ者のない船宿である。この界隈には、七軒の船宿があって、朝夕は遊びの客で賑わう。吉原に繰り出す者だけでなく、商談や休憩に宿を使う者もあった。

お珠は二十五年前の二十歳のときに、川澄の若旦那次太郎のもとに嫁いできた。舅姑が亡くなって、亭主の次太郎は先代次右衛門の名を継いで今は主人となっている。

お珠も気働きの利く愛想のよいおかみとして、客の評判がよかった。

河岸の道にも、人や荷車の行き来がある。対岸の箱崎町や南茅場町には、商家の土蔵が並んでいた。川と陸から、荷が絶え間なく出入りしてゆく。はるか西の空を見ると、まだ頭に雪を被った富士のお山の姿も望めた。

「おや」

水を撒いていたお珠は、手を止めた。暖簾をかき分けて、宿に入って行く女の姿を見かけたからだ。

「いらっしゃいませ」

迎え入れる声が聞こえた。女は客ということらしかった。お珠は水桶を建物の脇に置くと、自分も中に入っていった。次右衛門は、昼過ぎに出かけている。

客は二十六、七といった年頃の女房である。きっちりとした化粧をし、鬢付け油のにおいも鼻をくすぐってくる。身につけているものは絹の上物で、髪飾りも意匠の凝ったものだった。

大店の女房といった風情である。

ふっくらとした面立ちだが、なかなかの美貌だ。ただどこかに、人目を憚る気配があった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

船宿に女が一人でやって来るというのは、訳ありに違いない。

「どうぞ、どうぞ。おあがりください」

玄関先であれこれやり取りするのは野暮なことと割り切って、中に上げた。川澄には、二階に川が見渡せる部屋が四間ある。一番奥にある松の間に招き入れた。

四部屋は、奥から松、竹、梅、霧の間と呼んでいる。

女は常連ではない。しかし初めて見る顔でもなかった。前に来たことがある。半月ほど前のことだと思い出した。

そのときは、二つ三つ年若の男連れだった。

「あとから人が来ますんで、そうしたらここへ通してくださいな。ちづといいます」

それだけ言うと、閉じてあった障子戸を一寸ほど開けた。

「承知いたしました」

笑みを浮かべて、頭を下げるとお珠は退出した。余計なことは言わない。

「お久実ちゃん。今のお客さんに、お茶を運んできてちょうだい」

階下の帳場に戻ると、手伝いに来ている姪のお久実に命じた。

十七のお久実は、興味津々（きょうみしんしん）という顔をしている。茶の用意をする背中に、声をかけた。

「顔をじろじろ見ちゃあいけない。お茶を出したら、余計なことは言わないでさっさと戻ってくるんだよ」

「はあい」

富士額（びたい）でぱっちりとした目、肌が浅黒いのを除けば、かなり可愛い。明るく働き者であることは、伯母（おば）である自分が誰よりも分かっていた。

連れ合い次右衛門の妹の娘である。幼少の頃から顔出しをしているので、実の娘のようだ。

「行ってきます」

茶を持ったお久実が、部屋を出て行った。

山谷堀を往復するための船宿だから、泊まりの客はほとんどない。貸し船業である。だから吉原で遊んだ客を朝、山谷堀から迎え、夕方送り出すということが、商（あきな）いの大半といえた。

したがって、やっと八つ（午後二時）を過ぎたばかりというのは、船宿にとっては暇（ひま）な刻限だといえた。宿にいる客は、二階の一部屋にこれから山谷まで

向かうという侍が、一人いるだけだった。

四半刻（三十分）ほど前に来て、二階手前の霧の間で酒を飲んでいる。これから遊びに行こうという腹づもりだ。

声がかけられれば、すぐにでも舟を出すことができた。

お久実が二階から降りてきた。

「ねえねえ。あの人、前にも来ましたね。半月くらい前です。あたし覚えていますよ」

そのときも、お久実はいたらしい。家のある神田富松町から、三日に一度くらいの割でやって来て、手伝いをしたりお喋りをしたりしていた。

「きっと、あのときの男の人が来るんですね」

嬉しそうに言っている。

「さあ、どうだかね」

お久実も、そろそろ嫁にやらなければならない年頃になっている。しかしそういう気持ちはまるでないらしく、今は浅草奥山の宮地芝居に出ている役者中村大三郎に夢中になっていた。川澄に手伝いに来るのは、その木戸銭のための駄賃が欲しいからである。

父親の甲兵衛は櫛職人の親方で、仕事にも子育てにも厳しいところがあった。そこへゆくと次右衛門とお珠の夫婦には子がなく、可愛がられるので、気楽に遊びに来ていた。

「あの子が霧太郎と一緒になって川澄を継いでくれたら、万々歳なんだけどねえ」

と、お珠は溜息をつく。

霧太郎というのは、お珠の実弟鍬蔵の二十四歳になる倅である。血を分けたたった一人の弟である鍬蔵は、日本橋小網町堀江町界隈を縄張りにする岡っ引きだった。しかし二年前に流行の風邪をこじらせてあっけなく命を失ってしまった。

鍬蔵の女房おるいが心の臓の病で亡くなったのは十四年前。十歳だった霧太郎を、伯母として面倒を見てきた。船頭としての腕を、次右衛門が仕込んできた。

今は父親の縄張りを引き継いで、南町奉行所定町廻り同心浦部三五郎から手札を受けて、岡っ引き稼業を引き継いでいる。ただ船頭としてはなかなかの腕を持っているので、川澄の仕事を手伝っていた。

体は丈夫だし、父親の鍬蔵に瓜二つ。自分にも懐(なつ)いている。少々おっちょこちょいなのは玉に瑕(きず)だが、お久実と一緒になってくれれば、川澄にしてみればこれ以上のことはない。

「あんた霧太郎と一緒になって、この川澄を盛り立てていってくれないか」

次右衛門と話し合った上で、お久実に言ってみたことがある。こちらは、本気だった。

「え、いやだぁ」

けらけらと笑って、それきりだ。霧太郎とお久実は、幼いときから従兄妹(いとこ)という感じで育ってきた。

「ええっ」

霧太郎に話したら、ただ驚いた。大きな目をぱちくりさせただけである。

「まあ、おいおいその気にさせていこう」

と、次右衛門は言っていた。もちろんお珠にしても、そうなればいいと考えている。

女の客が来て、四半刻近くが過ぎた。連れはまだ現れない。そのとき霧の間の客が、二階から降りてきた。

「舟を出してもらおうか」
顔をこちらには向けず、くぐもった声で言った。
「はいはい、承知いたしました」
代金を受け取ったお珠は、宿の裏手にある長屋に声をかけに行った。霧太郎を含めた船頭四人は、ここで暮らしている。
「おれが行きますよ」
出てきたのは霧太郎だ。中肉中背で、逞しい体をしている。岡っ引きだが、こういうときは十手など腰に差していない。
「じゃあ、頼もうかね」
船着場に行くと、侍はもう待っていた。
年の頃二十四、五か、ほとんど顔を向けない。そっぽを向いていた。痩せているが骨太、面長で額に面ずれがあった。頬骨がやや出ていて、顎が四角張っている。
「どうぞ」
霧太郎が言うと、そそくさと乗り込んだ。
「ありがとうございました」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com